

高木幸二郎 著

恐慌論体系序説

大月書店 刊

たかき こうじ ろう
高木 幸二 郎

1938年 九州大学法文学部経済学科卒業

現 在 東洋大学教授

著 書 『貨幣——その理論と歴史』(有信堂)

『恐慌・再生産・貨幣制度』(大月書店)

訳 書 レオンチエフ『「資本論」解説』(国民文庫)

マルクス『経済学批判要綱』(大月書店)

現住所 福岡市西区東油山敷ケ原154-43

恐慌論体系序説

1956年11月10日第1刷発行

¥ 2000

1979年6月25日第14刷発行

著 者◎ 高木 幸二 郎

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

印刷 理想社印刷

発行所 株式会社 大 月 書 店 製本 関山製本

電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

はしがき

恐慌論の問題は、今日マルクス主義経済学においてその生命力と發展性の証しのための試金石とさえなっている。戦後最近までの経済循環の分析と恐慌の予測に関して、ソヴェト同盟をはじめアメリカ合衆国でもその他諸国でも、国際的に多くの理論家が既往の分析の誤りを認め自己批判をしている。マルクス経済学は今日の段階の恐慌分析において理論的破産をしてしまったのであろうか？『資本論』は、きわめて高度の發達を遂げた今日の独占資本主義段階の産業循環の分析にはもはや役立たないのであろうか？

私はそうは思わない。しかし今日国際的な立場からいえることができる、『資本論』に対する弁証法的見地からの研究と理解の欠落は、そのまま進めばついにこの大著も命脈涸渇したかの声を聞く日の到来しかねないほどの危険性を包蔵するものである。マルクス主義研究の水準の高いといわれる日本の学界において、この機械的『資本論』把握はもっとも瀰満しているように思われる。

この書物で私が強調しているのは、何よりもこの生きた方法論の見地の再建ということである。恐慌論の破産は、分析結果の当否にあるのではなく、むしろより根本的に方法論的行詰りと体系観の混乱に由るのである。浅学菲才を顧みず本書の中で先学諸氏に蕪言を呈したのも、ひたすら捉われることのない学問の進歩を心底から念願するからに外ならない。

この書物の成るまでに多くの人にお世話になった。なかでも終戦後の大連時代以来、この書物の原稿の運命に関して深い関心をもって下され、また出版についても色々配慮を下された石堂清倫氏に心から感謝の言葉を述べたいと思う。私に学生生活への門出の機会をつくってくれた友人中央大学麓健一教授にもこのさい改めて感謝し

たい。また私の研究者としての成長に絶えず暖かい厚意と激励とを寄せられた九州大学の馬場克三教授、同じく高木暢哉教授にも厚く御礼を申し上げたいと思う。昨年私が病床に倒れたときにも、これらの方々の行届いた御配慮と暖かい励ましによって、私は比較的短期に再びこの書の執筆にもどることができたのである。

一九五六年十月二十三日

高木幸二郎

凡 例

一 あとがきにも書いたように、この書物のかなりの部分はすでに発表されたことのある論稿から成っている。しかしまったく未発表で、こんどこの書物で始めて発表することになった部分も相当ある。その上、一度発表したものでも、書物にとり入れる場合に多かれ少なかれ補訂が加えられている。雑誌に発表してから後に気がついた不注意の誤謬なども訂正してある。参考のために既発表の論稿と本書への採録箇所をあげておく。

「マルクスの経済学体系と世界市場恐慌」(『経済評論』昭和二十八年七月号)——第一篇第二章の第二節以降第四節の終りに近い箇所まで。ただし多数の新しい注が附け加えられた上、本文にもところによりかなりの補入が行われた。

「資本蓄積過程の一問題点。——スウィージの『蓄積と労働力の価値』について——」(一橋大学『経済研究』第四卷第

一号、一九五三年一月)——第二篇第三章第四節第三項。

「再生産表式の根拠」(中央大学『経商論集』第四十四号、一九五二年六月)——第二篇第四章第一節。

「拡大再生産表式と恐慌」(『経済評論』昭和二十七年五月号)——同篇同章第二節。

「固定資本の補填と恐慌」(『経商論集』第五十号、一九五三年七月)——同篇同章第三節。

「再生産表式と恐慌における生活必需品と奢侈品」(『経商論集』第五十二号、一九五三年十月)——同篇同章第四節。

二 引用書名の註記は、始めて出て来る箇所では全書名をあげてあるが、同一の節や項のうちの近い箇所は略称にしてある。そのうち「資本論」については、原典としてはマルクス『エンゲルスレーニン研究所版の頁付と、邦訳では著者が昭和二十五年來使いつづけて来た長谷部文雄氏の日本評論社戦後版の冊数番号と頁付、および向坂逸郎氏の岩波文庫版の冊数番号と頁付を略記号式に示した。例えば III, 8, 217, (八) 一五頁とあれば、それぞれ原典巻数と頁付、長谷部氏訳の冊数番号と頁付、向坂氏訳の冊数番号と頁付の順になっている。青木文庫版の頁付は記さなかったが、原典頁付がこの訳書にはある

ので、この版の使用者も容易に引用箇所を検索しえよう。訳文は長谷部氏のものにかなり依存しているが、ある程度私なりに訳し変えているところも多い。後の方では向坂氏訳をも参照した。記して両氏に感謝の意を表したい。

三 マルクスの手紙からの引用は訳書頁付をあげなかった。これは手紙の日付によって、旧改造社全集版、岡崎次郎氏訳の岩波文庫版「マルクス・エンゲルス往復書簡」、同じく法政大学出版局刊「資本論に関する手紙」のいずれでも、随意の訳書を参照しうるからである。

四 引用文内に挿んだ「」は、著者の註釈または補入である。

目 次

はしがき
凡 例

第一篇 マルクス恐慌論の体系

第一章 序説——経済学における恐慌論の体系的位置づけ……………	三
第二章 マルクスの経済学批判体系の構想と現行『資本論』との関係について……………	七
第一節 久留間鮫造氏の所説……………	七
第二節 恐慌論の前提としての「競争」と「信用」について……………	六
第三節 『資本論』叙述体系の発展過程……………	三
一 マルクスの手紙を中心とする考証……………	三
二 土地所有と賃労働——考証の総括……………	三
第四節 「世界市場と恐慌」の包括的具体性……………	七

第二篇 『資本論』における恐慌の理論

第三章 直接的生産過程における恐慌の基本的規定とその諸契機	二三
第一節 生産力と生産関係の矛盾	二三
第二節 機械制大工業の確立と週期的恐慌の歴史的必然性	二六
第三節 資本関係の再生産としての單純再生産と拡大再生産	三〇
第四節 資本主義的蓄積の一般的法則における恐慌の諸契機	四〇
一 課題の設定	四〇
二 蓄積と「労働ファンド」——労賃の昂騰と労働力の価値	四三
三 スウィーजीの労働力の価値に関する所説の批判	五〇
四 波狀的運動の可能性と恐慌論の方法論の問題	五七
五 蓄積——集積——集中	六二
六 産業循環と産業予備軍	六五
七 産業循環と労賃水準、その他	七二
八 結 言	七五
第四章 社会的總資本の再生産と流通における恐慌の諸契機	七八
第一節 再生産表式の理論的根拠	七八

一	社会的生産の二部門への分割	一七
二	二部門分割と社会的分業	一八
三	表式の数式的表現	一九
四	再生産表式確立の意義	二六
第二節	拡大再生産表式と恐慌	二七
一	拡大再生産の特徴	二八
二	單純再生産から拡大再生産への移行に伴なう困難	二三
三	拡大再生産の順調な進行のための条件について	二七
四	拡大再生産表式の分析の結果による恐慌の検出	三三
五	表式と恐慌の基本的原因との関連	三七
六	表式の意義と限度	三四
七	結 言	三八
第三節	固定資本の補填と恐慌	三七
一	單純再生産表式における固定資本の貨幣的補填と現実的補填	三七
二	固定資本の補填における「攪乱」「恐慌」と産業循環	四三
三	拡大再生産表式と産業循環の各局面による検証	五〇
四	現実的循環における固定資本の補填と拡張の結合	五六

第四節	恐慌における生活必需品と奢侈品……………	三三
一	單純再生産表式における生活必需品と奢侈品——その恐慌と の関連規定……………	三三
二	拡大再生産表式における生活必需品と奢侈品……………	三四
三	第二部門の兩副次部門への分割の場合の拡大再生産逐年進行 の表式的展開……………	三四
四	好況期における奢侈品生産の拡大と恐慌によるその収縮……………	三五
第五章	「利潤率の傾向的低下の法則」——その内的諸矛盾の發現と恐慌……………	三八
第一節	利潤率の傾向的低下の法則との関連での恐慌論の『資本論』 における体系的地位……………	三八
第二節	過剰生産恐慌の核心点……………	三九
一	搾取とその実現の矛盾……………	三九
二	部門間不比例と過剰生産……………	四一
第三節	恐慌段階と不況段階……………	四二
一	過剰生産と過剰蓄積、資本の遊休と破壊……………	四三
二	均衡と利潤率の回復——動態の表式的説明……………	四三
あとがき	……………	四七

第一篇

マルクス恐慌論の体系

第一章 序説——経済学における恐慌論の体系的位位置づけ

マルクスがその経済学の全体系を一定の合目的な配列をもって完成しようと試みた最初の構想は、周知の「経済学批判」の「序説 (Einleitung)」の中にあたえられているものである。⁽¹⁾ すなわちこの「序説」の「三 経済学の方法」と題する項の末尾には、「経済的諸階級を、歴史的にそれらが規定的なものであつたその順序でならべること、実行できないことであり、また誤りであろう。むしろ、それらの序列は、それらが近代ブルジョア社会で相互に對してもつ關係によつて規定されている……」⁽²⁾と指摘した文章の後に、経済学の編別に関して次のように示されている。

「編別は明かに次のようにされるべきである。(一) 一般的・抽象的諸規定、したがつてそれらは多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、それも右に説明した意味である。(二) ブルジョア社会の内部的な仕組をなし、また基本的諸階級が存立する基礎となつている諸階級。資本、賃労働、土地所有。それら相互の關係。都市と農村。三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通。信用制度(私的)。(三) 国家の形態でのブルジョア社会の總括。それ自体との關係での考察。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。(四) 生産の國際的關係。國際的分業。國際の交換。輸出入。為替相場。(五) 世界市場と恐慌。⁽³⁾」

さらに比較的近年に至つて、いわゆる「経済学批判の準備ノート」の中から、同じくマルクスの当初の経済学体系構想への重要な示唆をあたえる資料となるところのプランのヴァリアントが発見され發表されるに至つた。それは今日右の準備ノートを集大成して完成刊行された『経済学批判要綱(草案) 一八五七—一八五八年』の中にあ

たえられている。いま右『要綱』の中から、『序説』のプランのほかに見出されるプランのヴァリアントのうちの二つを、記載の順序にしたがって取り出して見る。

(一)「交換価値、貨幣、価格が考察されるこの第一篇では、諸商品はつねに既存のものとして現われる。形態規定は単純である。われわれは諸商品が社会的生産の諸規定を表現することを知っているが、しかし社会的生産そのものは前提である。しかも諸商品はこうした規定において指定されているのではない。……しかしながら、自己自身を通じて商品世界は、自分をのりこえて、生産諸関係として、指定されている経済的諸関係を指し示す。したがって生産の内部的な仕組が第二篇であり、国家における総括が第三篇であり、国際的関係が第四篇であり、世界市場が終篇をなす。この世界市場の篇では、生産は総体性として指定され、またその諸契機のいずれもが同様に指定されている。だが同時にそこではすべての矛盾が過程に登場する。世界市場はこの場合またも同様に全体の前提をなし、その担い手をなす。そのさい恐慌は、前提をのりこえることへの全般的な指示であり、新しい歴史的型態の受容への促迫(Dringen)である。」(傍点箇所⁽⁴⁾の強調は原文のもの。以下もとくにことわらないかぎり同様。)

(二)「I (1) 資本の一般的概念。—— (2) 資本の特殊性、すなわち、流動資本、固定資本。(生活手段としての、原料としての、労働用具としての資本。)(3) 貨幣としての資本。II (1) 資本の量、蓄積。—— (2) それ自身で測られた資本。利潤。利子。資本の価値、すなわち、利子と利潤として、それ自身から区別された資本。(3) 諸資本の流通。(α) 資本と資本との交換。資本と所得との交換。資本と諸価格。(β) 諸資本の競争。(γ) 諸資本の集積。III 信用としての資本。IV 株式資本としての資本。V 金融市場としての資本。VI 富の源泉としての資本。資本家の資本ののちにつづいて土地所有を取扱うべきであろう。そののちに賃労働。この三つがすべて前提されているのち、いまやその内的総体性において規定された流通として、諸価格の運動。他方では、生産がその三つの基本諸形態と流通の諸前提のかたちで指定されたものとしての、三つの階級。次には、国家。(国家とブルジョ

ヨア社会。——租税、または不生産的諸階級の存在。——国債。——人口。——外側へ向つての国家、すなわち、植民地。外国貿易。為替相場。國際的鑄貨としての貨幣。——最後に、世界市場。ブルジョア社会が国家をのりこえて拡張すること。恐慌。交換価値に立脚する生産様式と社会形態の解体。個人的労働を社会的労働として、またその反対に、現実的に指定すること⁽⁵⁾。】

以上にあげた経済学の全体系の編別に関するマルクスの構想は、『経済学批判』の「序言 (Vorwort)」の冒頭の次の言葉にいつそう簡明に表現されている。

「私はブルジョア経済の体制を次の順序で考察する、——資本、土地所有、賃労働、それから国家、外国貿易、世界市場。このはじめの三つの項目では、私は近代ブルジョア社会が分かれているところの三大階級の経済的生存条件を研究する。他の三つの項目の関連は見ても明かな通りである⁽⁶⁾。】

さてこれらの資料によつて、まずわれわれは、マルクスがその経済学の全体系の最終篇に世界市場論を予定していたこと、そして、先の三つのプランのいずれもの最後の箇所にも明かなように、恐慌の問題を世界市場論の不可分の要素として取上げていることを確認することができる。いいかえるならば、マルクスは恐慌を、世界市場との関連におけるそのもっとも具体的な包括的な形姿における研究の対象として、経済学の体系において最終の地位を占めるものとして予定していたのだということを、窺い知ることができる。

だがこのことと関連して直ちに問題となることは、現在われわれの手にもつ『資本論』三巻の体系は、右の「序説」の「編別」ないしは「序言」の「順序」において示された経済学全体系のうちの、如何なる範囲までを含むかということであつて、この点についてはすでに日本でも多くの論議がかわされているところである⁽⁷⁾。この後の問題についての私自身の見解は、次章である程度詳細に述べるつもりである。ただここでもかなりはっきりいえることは、『資本論』三巻の体系の中に、右の「編別」ないし「順序」の全体系の後半、すなわち「順序」の簡約化された表

現による「国家、外国貿易、世界市場」に該当する研究は、少なくとも独自の研究としてはどこにもその地位があたえられていないことである。この点については疑問の余地はなく、体系観に関する方法論上の異論はあっても、そのこと自体を否定する人は少ないと思われる。したがってこのことから次のようにいうことができる。

すなわち、「順序」における少なくとも「国家」以降の項目は、マルクスによる当初の構想にもかかわらず、彼の経済学著述の全体系の展開の形では結局未完成に終わったのであり、したがってまた、恐慌の問題も、マルクスの当初の構想における世界市場論の重要な一内容をなすものとして、先に見た項目配列の最後に特記されたような独自の研究対象としては、ついに展開されることなくして終ったのである。

実際マルクスは、さきの「序説」やその他のプラン・ヴァリアントの中で、その研究対象の序列を示して、彼の経済学批判全体系のうちに占める恐慌論の地位をその最後のものとして規定していたばかりでなく、また『経済学批判要綱』の手稿執筆後に属する『剰余価値学説史』（一八六二—一八六三年）や、さらにその後の執筆に属する『資本論』において、恐慌の問題は世界市場との関連における独自の研究対象としては、これらの著作とは別個に取扱われるべき旨をしばしば言明している。いまなお念のためにこの点の若干の引証を行えば次の如くである。

カール・カウツキーの編纂した『剰余価値学説史』の第二巻第三章「資本の蓄積と恐慌」の第四節「恐慌」のなかには、次のような叙述があたえられている。

「そしてこのことがブルジョア経済の考察にあたつて重要なことである。世界市場恐慌は、ブルジョア経済のすべての諸矛盾の現実的総括と強力的調整として把握されなくてはならぬ。したがってこの恐慌で総括される個々の諸契機は、ブルジョア経済のそれぞれの面に現われ出て展開されざるをえないし、われわれがブルジョア経済のなかに突き進めば突き進むほど、一方にはかかる矛盾の新しい諸規定が展開され、他方にはブルジョア経済のより抽象的な諸形態が、より具体的な諸形態において再現し、また含まれているものとして証明されざるをえない。」⁽⁸⁾